

T発

再開発続く銀座で、解体される運命だった昭和初期のレトロビルが生き残った。保存を手掛けたのは大分県から上京した若手実業家。「早く銀座の住民になりたい」。街への貢献の一步は、住民に愛されてきた景観を守ることだった。



④ オープニング初日、来場者らでにぎわう「MUSEE」。ビルの歴史を伝えるため板張りの天井部分を残した。壁のプレート、窓枠もそのまま
⑤ 外観はれんが風。昭和通り沿いに立つ



大分の若手実業家

銀座一丁目の昭和通り沿い。れんが風のスクラッチタイルの外観がノスタルジィを誘う三階建てのビルに、次々と見学者が訪れた。

六日オープンした「銀座レトロギャラリー MUSEE (ミュゼ)」。運営する「川崎ブランドデザイン」の社長、川崎力宏さん(む)は「ここまで美しくよみがえるとは思っていませんでした。設計者も分からないビルですが、古い建物の良さを感じてもらいたい」と笑顔で語った。

一九三二(昭和七)年に完成した「旧宮脇ビル」を改装した。かつての高級アパートにユニークなギャラリーが集まり、銀座の新たな所として知られる近くの「奥野ビル」と同時期の建築だ。かつてはオフィスとして使わ

古ビルの美 銀座に残す



解体、一転保存へ

れていたが、しばらく前から二、三階が空き室となり、一階で小料理屋が営業していた。その小料理屋が退去するこ

とになり、昨年十二月、川崎さんはビルを敷地ごと購入した。八十年もの間、風雨にさらされたビルは傷みが激しかった。大分県の老舗建設会社

のオーナー家に生まれ、住宅メーカーに勤務した経験もある川崎さんは、収益を上げるために建物を取り壊し新築することを考えていた。高層ビル案も検討した。

ところが、ビルに何度も足を運ぶうち気持ちは変化していった。「壊しちゃうのつらいわねえ」。小料理屋のおかみの言葉が胸に響いた。古いビルが、地域の住民や働く人にはかけがえのない存在であることに気がついた。

さんは二〇一〇年十一月に亡くなった。家業は自分が継ぐはずだったが、経営方針の違いから幹部と対立、会社を離れることになった。心機一転、コンサルティング会社の社長として独立。昨春上京し営業拠点を探す中で、このビルと出合った。

不安いっぱいの上京だった。だが、職人とともにビルの改修作業に汗を流すうち「ここで頑張ろう」という気持ちになった。「工事中も、近隣の八十代、九十代の方が訪ねてきて『子どもの時からある建物だから頑張って』と声を掛けてもらった。うれしかった」

九月一日までのオープニング企画では、チョウの研究者でもあった裕一さんの功績を紹介する展示や、川崎さん一家と長く付き合いがあった前衛美術作家・風倉匠さんの作品展を開いている。その後は貸しギャラリーとして営業する。「若いアーティストが建物に刺激を受け、新たな創造につなげてもらえれば」と意欲を語る。

文・小林由比／写真・岩本旭人、小平哲章／紙面構成・折尾裕子



「MUSEE」の3階展示室から下りる階段付近。壁に昔のガス管が残る